



ショートコメント

★★★

Data 2023-107

監督：ケネス・ブラナー
 原作：アガサ・クリスティ『ハロウィーン・パーティー』
 出演：ケネス・ブラナー／ミシェル・ヨー／ティナ・フェイ／ジュード・ヒル／ジェイミー・ドーナ

名探偵ポアロ ベネチアの亡霊

2023年／アメリカ映画

配給：ウォルト・ディズニー・ジャパン／103分

2023（令和5）年9月16日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

みどころ

本作は“世界一売れた作家”アガサ・クリスティの原作を映画化した名探偵ポアロシリーズの『オリエント急行殺人事件』（17年）、『ナイル殺人事件』（22年）に続く第3弾。本作では、事実上“引退”しているポアロを、現在スランプ中の女流ベストセラー作家が口説き落とし、“世界最高の霊能者”が行う降霊会に出席させるところがミソだが、その狙いは？

本作の登場人物（＝降霊会への出席者）は実に多い。そのそれぞれが、何らかの“曰く因縁”を抱えているのは当然だが、最初の犠牲者は誰？そして、その死因は？犯人は？

名探偵の推理力は、関係者各人の事情聴取から！本作もその“定石”通りの展開だが、さて、ポアロの考察力と推理力は如何に？そして、犯人発見への道筋は？水の都ベネチアを舞台とし、“降霊会”というおどろおどろしい雰囲気の中で進むミステリー展開をしっかりと楽しみたい。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

◆「世界一売れた作家」として認定された“ミステリーの女王”アガサ・クリスティが生涯を通して描き続けたのが“名探偵ポアロ”シリーズだ。ケネス・ブラナー監督はそんな原作を『オリエント急行殺人事件』（17年）（『シネマ 41』未掲載）、『ナイル殺人事件』（22年）（『シネマ 50』115頁）とシリーズ化して映画化してきたが、本作はその第3弾だ。

◆サブタイトルに『ベネチアの亡霊』とつけられているとおり、本作の舞台は“水の都”ベネチア。また、原作はアガサ・クリスティが1969年に発表した『ハロウィーン・パーティー』だから、本作ではハロウィンの日に子供の霊が現れるという、大きなお屋敷の降霊会の場面から本格的なストーリーが始まる。そこで、「私は“世界最高の霊能者”。私は死者の声を話せます。」と大言壮語する女性霊能者が、『エブエブ』こと『エブリング・エブリウェア・オール・アット・ワンス』（22年）（『シネマ 52』12頁）で大奮闘し、アカデミ

一賞主演女優賞をゲットしたミシェル・ヨー扮するレイノルズ夫人だから、それにも注目！

◆もともと、自他共に“世界一の名探偵”と認めるエルキュール・ポアロ（ケネス・ブラナー）も、今はすでに第一線を退き、ベネチアで流浪の日々を送っていた。そんなポアロを降霊会に（無理やり？）引っ張り出したのは、「世界で最も売れている」と自称している女性推理作家のアリアドニ・オリヴァ（ティナ・フェイ）だ。

オリヴァはミステリーのベストセラー本を多数出版しているのだから、レイノルズの降霊術を信じるなどもってのほかだが、如何に自分の知識を総動員しても、オリヴァにはレイノルズの降霊術がホンモノとしか思えなかったらしい。そこで、世界一の名探偵ポアロがそのインチキ性を見抜ければ、それも良し。もし、ポアロもレイノルズの降霊術に屈するようなら、それも良し。なぜなら、その両者とも、自分が新たに執筆するミステリー本のネタとして使えると考えたわけだ。

そんなオリヴァの思惑を見抜きつつ、ポアロは老骨に鞭打って、オペラ歌手のロウィーナ・ドレイク（ケリー・ライリー）が、死亡した最愛の娘アリシアの声を聞くために開催した降霊会に出席することに。

◆降霊会に出席する本作の登場人物は多い。その1人1人は、すべてポアロにとってはじめて出会う人だから、顔と名前を一致させるだけでも大変だが、降霊会が始まると、たちまち最初の犠牲者が出てしまったから、さあ大変。そして、そうなるポアロが名探偵としてその“捜査”に乗り出さざるを得なくなったのも当然だ。

そこで、ポアロはまず降霊会の会場となったお屋敷を封鎖した上、1人1人から事情聴取を始めることに。これがポアロ特有の捜査方法だが、そんな昔流の(?)作業の集積で本当に犯人にたどり着けるの・・・?

◆本作では、ポアロによる関係者からの事情聴取が続く中、ポアロ自身にも危険が迫り、あわや“ポアロ死す!”という事態に至るのが1つの見どころだ。しかして、そこまでの危険を犯しながらポアロがたどり着いた結論とは・・・?

本作の後半、約30分は、何とも鮮やかなポアロによる謎解きと真相解明の全面展開となるので、それに注目！私は、水上都市ベネチアは有名な観光都市だから、明るい太陽の下でキラキラと輝く水面が魅力だとばかり思っていた。しかし、本作はそうではなく、一貫して暗いトーンの中で始まる降霊会の雰囲気に合わせてるかのよう、ベネチアの街も暗いトーンばかりだ。その点に若干の不満が残るし、せっかくミシェル・ヨーを霊能者役として起用しながら、彼女が早々に死んでしまう脚本にも不満が残るが、名探偵ポアロによる謎解きの鮮やかさは本作でも健在だ。それ以上の特別な魅力はないにせよ、ほどよくまとまった作品だと評価。

2023 (令和5) 年9月20日記